

氏名(本籍)	渡部雪子(神奈川県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博甲第6242号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中学生が捉えた親の期待と適応に関する心理学的研究 -期待の認知と関連要員の検討-
主査	筑波大学教授 博士(心理学) 濱口佳和
副査	筑波大学准教授 博士(文学) 岡本智周
副査	筑波大学講師 博士(心理学) 佐藤純
副査	筑波大学准教授 博士(心理学) 佐藤有耕

## 論文の内容の要旨

### (目的)

本研究は、「中学生が捉えた親の期待」に焦点を当て、親の期待が中学生の心理社会的適応にどのような関連を示すのかを検討することを目的として行われた。従来、子どもによる親の期待認知は「どの程度期待されているか」という「期待されると感じる程度」が測定されることが多かった。しかし本研究では、(1)中学生が「親の期待をどのように受け止めるのか」(親の期待の受け止め方)といった認知された期待の質的側面と、親の期待に応えた、または応えられなかった時に親がどのような反応をするかについての中学生の「親の反応予期」の2つの側面から親の期待の認知のそれぞれの個人差測定尺度を開発し、(2)「親の期待の受け止め方」と「親の反応予期」が内的適応と外的適応のそれぞれに対して分化した関連を示すことを検討すること、(3)中学生のパーソナリティ要因と親への信頼感やコミュニケーションの、「親の期待の受け止め方」と「親の反応予期」への関連を検討することが目的とされた。

### (対象と方法)

本研究では、予備調査では大学生が調査対象であるが、殆どの研究で公立学校の中学生が調査対象者であった。研究方法は、個別記入式の無記名質問紙調査であり、学級ごとに配布され、集団での実施後回収された。本研究は人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施された。

### (結果)

研究1では、大学生を対象とした予備調査から「期待の受け止め方尺度」の項目を作成し、中学生を対象に実施し、因子分析により「積極的受け止め」、「負担的受け止め」、「失望回避的受け止め」の3因子からなる多次元性の尺度を作成した。一定の信頼性と妥当性も確認された。

研究2では、やはり大学生を対象とした予備調査をもとに「親の反応予期尺度」の項目を作成し、中学生を対象にデータを収集、因子分析の結果「サポート反応予期」と「落胆反応予期」の2因子からなる尺度が作成された。ここでも一定の信頼性の高さと同様の妥当性が確認された。

研究3では、「親の期待を感じる程度」を統制したうえで、新しく提唱された「期待の受け止め方」と「親

の反応予期」の2種類の期待認知変数が中学生の内的適応がどのような関連を示すかを検討した。階層的重回帰分析の結果、「期待の程度」を統制してもなお、「積極的受け止め」は内的適応に対して、「負担的受け止め」は内的不適応に対して有意な関連があることが明らかになった。

研究4では、「期待の受け止め方」に加えて「親の反応予期」の2尺度も加えて内的適応との関連を検討した。階層的重回帰分析の結果、「期待の程度」と「親の受け止め方」を統制しても、「落胆的反応予期」が「自己不明瞭」を促進することが明らかになった。

研究5では、「期待の程度」を統制した上で、「親の反応予期」がどの程度外的適応を説明するかを検討した。階層的重回帰分析の結果、「落胆的反応予期」は中学生の社会的スキルの遂行を促進することが、「サポート反応予期」は向学校行動、自主的学習態度などを促進することが明らかになった。

研究6では、研究5の「親の反応予期」に「期待の受け止め方」を加えて、外的適応指標との関連を検討した。階層的重回帰分析の結果、「期待の受け止め方」の諸変数は外的適応各指標の説明率を有意に増加させ、「期待の受け止め方」が内的適応のみならず外的適応にも有効であることが示された。

研究7では、中学生の信頼感とコンピテンスが「期待の受け止め方」と「親の反応予期」にどのような関連を示すかについて、質問紙法によって検討した。重回帰分析の結果、信頼感は積極的受け止めを促進し、負担的受け止めを抑制すること、さらに、サポート反応予期を促進することが明らかになった。「親の反応予期」に対するコンピテンスからの関連は有意ではなかった。

研究8では、親からの期待の伝達過程に注目し、中学生のパーソナリティと親とのコミュニケーションと「期待の受け止め方」・「親の反応予期」との関連が検討された。重回帰分析の結果、特に親のコミュニケーションが「期待の受け止め方」「親の反応予期」の両変数に関連を示すことが明らかになった。

#### (考察)

親の期待の子どもへの心理的影響を検討した研究では「期待の程度」だけが取り上げられてきたが、本研究の結果、「期待の程度」よりむしろ「親の期待の受け止め方」や子どもが期待に応えたり背いたりした時の「親の反応予期」が子どもの適応・不適応に強い関連を示すことが明らかになった。また「期待の受け止め方」や「親の反応予期」は中学生の親への信頼感やコミュニケーションの持ち方に影響されることも明らかになった。これらの知見は、親の期待が中学生に与える影響を検討していく上で、単に程度だけを問題にするのではなく、中学生から親への信頼感やコミュニケーションの持ち方を踏まえたうえで、受け止め方の質や親の反応の予期も併せて考える必要を示している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

「期待を感じる程度」の測定にやや難があるため、「期待の受け止め方」「親の反応予期」の外的・内的適応への関連がやや高めに出了可能性はある。しかし、新しい観点からの親の期待を測定できる尺度を開発したこと、これらの新しい期待変数の有効性を示せた点は意義がある。中学生であるがゆえの特色をいかに示すか、またいかに心理臨床的な含意が豊かな研究としていくかが今後の課題と言える。

平成24年1月19日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。